はしがき

現代の世界では技術革新により地球から時間と空間の制約が縮減され、かつ、リンガ・フランカとしての英語によるモノリンガル化したコミュニケーションの単一化が進みつつあります。言語教育研究もその趨勢とは無関係ではなく、研究の背景・存在理由も改めて問い直される時期に来ていると言えます。主に、それは５つの主要な問題に関連しています。まず、欧米諸語あるいはアジアの主要言語のみに視野に入れていた従来の研究範囲から、全地球的視点からアジア・アフリカ諸言語の多様な言語類型・構造特徴に対応した言語教育手法を開発するということ。二つ目は、e ラーニングやコーパス言語学など新しい技術上の進展と活用について検討していくこと。三つ目は、ヨーロッパにおける CEFR による言語教育上の「実験」を検証しつつ高等教育機関での応用実践について調査と研究していくこと。四つ目に、留学・移民で学習者の移動が柔軟化してゆくなかで、それに対して言語教育をどのように対応させてゆくかについて。五つ目は、複言語主義的・複文化的な観点から言語能力到達度評価の標準化と個性化についての施策方針に関して、研究対象国でのケーススタディーを行うというものです。

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金の助成を得て、2009 年度より 2011 年度まで推進された基盤研究（B）課題研究「EU および日本の高等教育機関における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」(Comprehensive Research on Foreign Language Education Policies and the Evaluation Systems for Language Proficiency in Higher Education in the EU and JAPAN)」（代表者富盛伸夫）は、その広汎な研究の端緒を開くものと位置づけられますが、またすでに、2006 年度より 3 年間遂行した基盤研究（B）課題研究「拡大 EU 諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」（代表者富盛伸夫）の研究成果を引き継いだ上で企画されました。

本研究報告書は、この 3 年にわたる研究成果の一部をまとめたものです。2009 年から、いわゆる科研報告書としては CD-ROM や Web により発信するという方式が容認され、紙媒体での成果報告書は提出義務がなくなりましたが、本研究グループでは手に取りやすい報告書として旧来の方式もあわせてとることとしました。

最後に、多岐に渡る研究遂行上、便宜・支援を頂いた東京外国語大学および国内外の大学・研究機関に感謝するとともに、長期間にわたって献身的に研究補助、編集作業をしていただいた東京外国語大学語学研究所事務補佐の深尾啓子さん、本学大学院総合国際学研究科修士課程学生萩原絵理香さんに深く御礼申し上げます。

研究代表者　富盛伸夫